

アフリカ食料問題解決のために～理由を知り、解決の方法を考える～

青森県立田名部高等学校 千葉栄美

授業の流れ

【1時間目】

1) アフリカの食料をめぐる現状

図で食料不足の人口が多いことを確認

2) その原因を考える (図やグラフから確認)

①人口増加

②モノカルチャー経済

3) 人口増加やモノカルチャー経済以外の要因を考える

①国家体制の脆弱さ

②穀物の流通、貯蔵体制の不備

③安易な食料援助、など

【2時間目】

1) 食料問題解決の方法を考える

主体的に解決方法を各自が考え提案

2) アフリカの食料問題を通して日本を考える

1. 【1時間目】現状認識と原因を考える

1) アフリカの食料をめぐる現状

必要なカロリーを摂取できない人の割合が多い国が、アフリカ(とくにサハラ以南のアフリカ)に多いことを『世界を学ぶ高校生の地理A 最新版』(以下、教科書)p.138「②必要なカロリーを摂取できていない人の割合(国・地域別)」(図1)から注目させ、食料不足の現実を伝える。

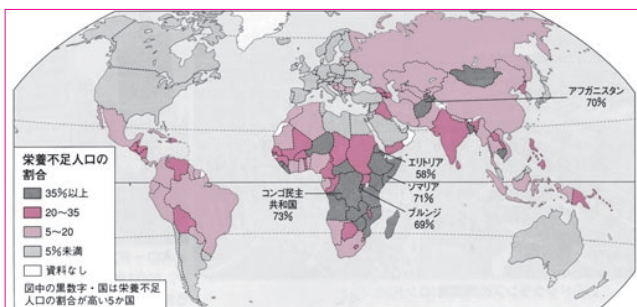


図1 『世界を学ぶ高校生の地理A 最新版』 p.138

②必要なカロリーを摂取できていない人の割合(国・地域別)

このとき、図だけではなく、やせた大地や飢饉で苦しむ人の写真などをみせる(少し古いが、ピューリッツァー賞を受賞した「ハゲタカと少女」などをみせたりすることも多い)。

2) 食料不足の原因を考える

①急激な人口増加による食料不足

アフリカ諸国は1960年代から急激に人口が増加したこと、現在もひじょうに高い人口増加率であることを『世界の諸地域NOW 2011』(以下、資料集)p.210「④人口増加率とおもな国の対応」(図2)から認識させる。第二次世界大戦後、食生活や衛生状態、医療の改善により死亡率が低下したにもかかわらず、高い出生率が維持されたことが原因と考えられる。一般的に貧しい国ほど子どもを働き手と考え人口抑制には消極的となる。資料集p.210「②地域別の人口の変化」(図3)では、アジアもアフリカ同様に急激な人口増加がみられる。しかし、1960年代以降アジアでは米、小麦などの穀物を中心に「緑の革命」による増産が進み、人口は増加したものの深刻な食料不足には陥っていない。一方、アフリカでは人口増加を支える主食となる穀物の自給率がひじょうに低い。食料の生産、輸出を行っている国でも、それは穀物ではなく、コーヒーや茶などの商品作物であることが多い。

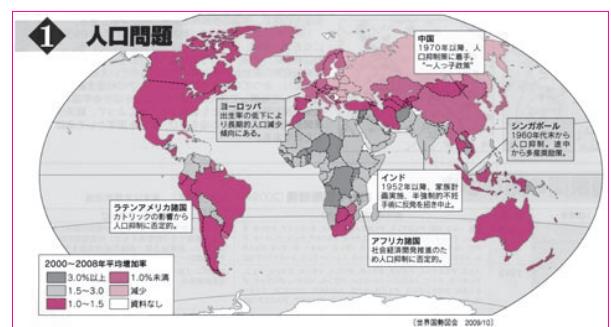
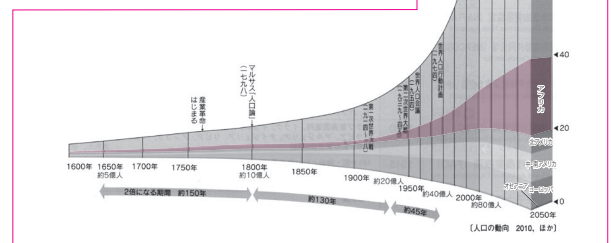
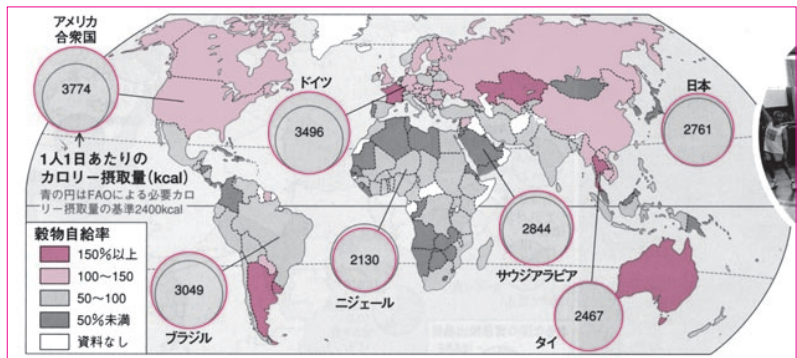
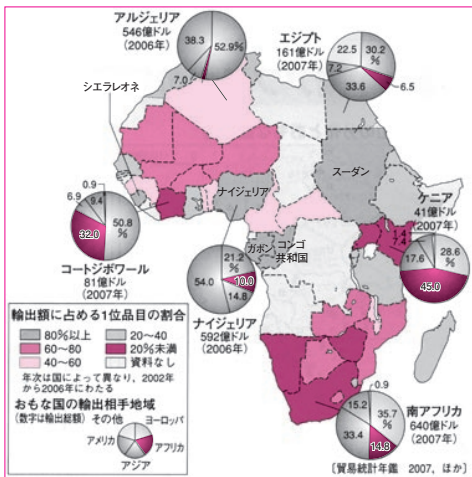


図2 『世界の諸地域 NOW 2011』 p.210

①人口増加率とおもな国の対応

図3 ②地域別の人口の変化





↑ 図5 『世界を学ぶ高校生地理A 最新版』 p.139
 ③世界の穀物自給率と1人1日あたりのカロリー摂取量

← 図4 『世界の諸地域NOW 2011』 p.95
 ⑩アフリカの貿易輸出

②モノカルチャー経済

15世紀頃からヨーロッパ列強がアフリカに進出し、16世紀から19世紀にかけて奴隷貿易、19世紀末には植民地支配を行った。そうした歴史の中で、アフリカ諸国の経済の発展が阻害され、ヨーロッパ列強が求めるコーヒーや茶などのプランテーション作物や鉱産資源などの一次製品の生産に偏った経済構造が構築された(モノカルチャー経済)。独立後もその経済構造が残り、現在でもアフリカ諸国では輸出に占める一次製品の割合が極めて高い〔資料集p.95「⑩アフリカの貿易輸出」(図4)〕。モノカルチャー経済下では、商品作物の生産に偏り、自給用の食料の生産が不足する〔教科書p.139「③世界の穀物自給率と1人1日あたりのカロリー摂取量」(図5)〕。また、一次製品に頼る経済は不安定で、外貨が不足する国が多く、食料生産が減少すると、たちまち食料不足となることが多い。

参考

プランテーション農業と食料問題との関係 ～プランテーション農業の何が問題か～

- ①商品作物の生産が優先され、自給的な食料生産が圧迫される。
- ②一種類の作物に依存しているため、気候変動や病虫害の影響が大きく、生産が不安定になりやすい。
- ③国際価格の変動に大きく左右されやすく、価格の下落時には国の財政を圧迫する。
- ④自作農が育たず、農業技術が継承されない。

3) 人口増加とモノカルチャー経済以外の要因

～なぜアフリカ諸国の食料問題は解決しないのか～

近年は、アフリカにおいても穀物における「緑の革命」が普及し、食料生産が増加している。また、モノカルチャー経済からの脱却をめざし、経済の多角化や工業化が進められている。にもかかわらず、依然として食料

不足に悩み栄養不足人口の多い国が存在する。授業ではその原因を生徒に考えさせたい。

ここでは、具体的な国名をあげて事例を紹介する。アフリカといっても多くの国があり、石油のとれるエジプト、リビアなどの北アフリカ諸国などは栄養不足人口の割合は低い。また、歴史や国家体制、政治もさまざまそれぞれの国によって抱える問題は違う。全ての国を個別に紹介することは不可能だが、せめてアフリカをステレオタイプで理解することがないように留意したい。

①国家体制の脆弱さ(ジンバブエの例)

ジンバブエでは独立後安定した農業生産と鉱物資源で国の財政状態はよかった。1980年代は余剰作物を近隣国に輸出していた。しかし政権が長期化した90年代半ばから政治的な迷走が続き、国内の経済は混乱した。

ジンバブエの政治的混乱

- 1998年 コンゴ民主共和国の内戦に対し、年1万人の派兵
年間1億ドル以上の外貨が流出
- 2000年 白人農場の強行接収
農場経営の知識のない農場主が出現
- 2007年 突然の価格半減令
経済の大混乱 技術者の国外流出

こうした政策の結果、2008年2月発表の失業率は80%、農業生産が需要の半分以下となり、国内に飢えが広がっている。

植民地支配がアフリカに引いた国境線は、数多くの多民族国家をつくり出した。それは国民意識を形成する上での障害となり、国民国家をつくりにくい状態を生み出している。国益よりも民族集団の利益が優先されるケースが多いため、国家の一体感は薄く、指導者も国づくりという概念をもちにくい。一般的に農業は大きな利権に

つながらないことから、軽視される傾向が強い。

こうした国家体制の脆弱さが国の経済の発展を阻害し、食料問題を深刻化している側面もある。

②穀物の流通、貯蔵体制の不備（タンザニアの例）

タンザニアでは1970年代前半からメイズ（とうもろこし）を恒常的に輸入している。70年代に生産量が激減して一時的な食料不足が発生したものの、それ以降は順調に食料生産が増加しているにもかかわらず、輸入が続いている。その原因は流通機関の不備である。タンザニアでは、主食であるメイズの国内生産量や流通量を政府が把握できていない。政府は供給量を確保するため、国内生産地からの流通ではなく、輸入を増大させた。急激な都市化により増大した都市人口を支えるために、結果として安価な輸入品に頼るようになったのである。

食料の増産を奨励すればアフリカの食料問題は解決すると考えられがちだが、食料の「保存」「流通」も大きな問題である。保存が悪いために失われる食べ物の量はアフリカではかなり多い。また農民の多くは農場に貯蔵設備をもっていない。したがって多くの農民はコントリーエレベーターをもつアグリビジネスの企業に穀物をひじょうに安い価格で売らざるを得ないのである。

③安易な食料援助など（ガーナの例）

ガーナでは1970年前半までは国内の食料自給を達成していたが、1980年代、大干ばつの発生で国内の食料が不足し、米を輸入や外国からの援助に頼った。その後低価格な輸入米に人気が集まり、国内産の米の需要が低下した〔教科書p.141「④ガーナに援助米がきたあと」(図6)〕。



図6 『世界を学ぶ高校生の地理A 最新版』p.141
④ガーナに援助米がきたあと

食料不足の原因は多くの問題が複合的に重なり合って発生している。紹介した例のほかにも砂漠化、地球温暖化による環境的な問題や紛争や内戦など人的要因によるもの、穀物の多くが肉の生産のための飼料用として使われていることによる、穀物の不足や価格の高騰などもあげられる。サハラ以南のアフリカでは現在も人口の3分の1超が飢えている。食料問題の解決は決して簡単な事ではないが、あきらめずに解決の道を探る必要がある。

2. 【2時間目】食料問題解決の道を考える

あなたは食料問題に悩むアフリカのある国の大統領です。あなたの国の食料問題を解決するために有効な法律を一つ考えなさい。またなぜそれを選んだのかも説明しなさい。

1) 食料問題解決の方法を考える

前時の授業を参考に上記のような課題を提示し、さまざまな問題の中から自分ならまず何に手をつけるかを考えさせ、班で話し合わせる。班内で意見を集約し、一つの法案をまとめる。A3の用紙に簡単に法案名やそのメリットなどを書き、プレゼンテーションをさせる。

考えられる例) ・人口抑制法案
・農業教育推進法案
・国有貯蔵施設の設立法案 など

援助という立場ではなく、アフリカに暮らす人という立場からたくさんある問題の中からまず、何に手をつけるかを考えさせ、発表させる。生徒に自由に意見を出させると、安直なものから考えの深いものまでさまざまな案が出る。プレゼンテーションの紙には図や絵を用いたユニークなものも多い。よい案には賞を与える。発表の後には実際にアフリカで行われている食料増産のための新しい取り組みを紹介する〔ジンバブエ人による農業、NGO「地方農村発展協力機構（ORAP）」の活動など〕。

2) アフリカの食料問題と日本

最後に、再び図5をみせ、アフリカ諸国だけではなく、日本の食料自給率も低いことを読み取らせる。食料を輸入する外貨があるため日本では飢餓にならないだけで、生産力がありながら、安い輸入品に頼り自給率が50%を切っている状況はアフリカ諸国と同様である。これを意識させ、次時の「食料を輸入に頼る国の問題」に進める。

おわりに

地理の学習に必要なのは「多角的な見方」と「想像力」だと思う。地理学習を通じて、問題の本質をさまざまな点から考えられる力と「もし自分だったら」と想像する力を生徒の中につけていくことが、社会を生き抜いていく力になるのだと思う。

【参考文献】

松本仁一「アフリカ・レポート―壊れる国、生きる人々」2008 岩波新書、西川潤「データブック食料」2008 岩波ブックレット、細見眞也・島田周平・池野旬「アフリカの食糧問題：ガーナ・ナイジェリア・タンザニアの事例」1996 アジア経済研究所、船田クラークセンさやか「アフリカ学入門 ポップカルチャーから政治経済まで」吉田昌夫〈アフリカ食料安全保障論―食料安全保障問題と農村開発〉2010 明石書店、山田肖子「アフリカのいまを知らう」2008 岩波ジュニア新書、東京大学農学部編「人口と食糧」1998 朝倉書店、スーザン・ジョージ「なぜ世界の半分が飢えるのか―食糧危機の構造」1984 朝日選書